

ルソーの夢

—むすんでひらいて考—(その二)

海老沢敏

二、《むすんでひらいて》はルソー作曲か？

昭和四十六年（一九七一年）七月六日付の朝日新聞夕刊に《根拠を欠くルソー作曲》なる短文が掲載された。同紙の《研究ノート》欄にあらわれたこのエッセイは東大教授小林善彦氏の執筆になるものである。童謡《結んで開いて、手を打ってむすんで》のメロディーが最近ルソー作曲という説はかなりひろまっています。テレビのクイズ番組などにも出てくるようになっていることを指摘した小林氏は、しかし、この説に数年前から疑いをもつようになつたと述懐しておられる。それはこのメロディーがルソー作曲

だというひとはあっても、いったいルソーのいかなる作品の中にあるのかを明らかにした人がいないからだと疑意を表明する氏は、ルソー作曲説がどのようにして起つたかを説明している。

《むすんでひらいて》のメロディーは、明治十五年に文部省音楽取調掛が作製した、わが国最初の唱歌教材である《小学唱歌集初編》に含まれている《見わたせば、あおやなぎ、花桜、こぎまぜて》なる唱歌と同じ旋律であり、この歌詞ならびに旋律がわが国にひろく流布することとなった。だが、この《小学唱歌集初編》には作曲者の各が記されていたわけではない。ところが、この唱歌集の編集者だった伊沢修二が、同年にもよおした唱歌の発表会で曲目の解説をおこなうために書いた《唱歌略説》なるノートには、この唱歌が《仏人の学士ルソーが睡眠中に作曲した》と

記されている。しかし、「彼が睡眠中に作曲したなどという逸話は、本人もいっていないし、いい伝えもまったくない。」

小林氏は、そのあと、「伊沢修二といえば、後に東京音楽学校（現在の東京芸大音楽学部）の初代校長になったほどの人であるから、世の人が信じたのも無理からぬことである。そしていささか失礼ない方をすれば、へ一犬虚に吠ゆれば、万犬実を伝う」という言葉もある。本当の作曲者はだれなのであるか」と結んでおられる。

小林善彦氏のこの小文に対して、音楽教育学関係の雑誌に反論が立ち現われた。最近惜しくも急逝された相愛女子大学の馬場健氏の論文《伊沢修二と〈小学唱歌集〉——根拠を欠くルソー作曲——》（音楽教育研究）第一五巻第四号・昭和四十七年（一九七二年）四月号）がそれである。反論としては半年以上も経過しているので、一見遅きに失しているかのようだが、この論文の「付記」にみられるように、馬場氏は小林氏の小文掲載直後、朝日新聞に《小さな反論》を投稿しておられるので、馬場氏が小林氏の意見に直接反応されたことになるだろう。

馬場氏は小林氏の文章を全文引用紹介した上で、「はたして本当にルソー作曲というのは、〈根拠を欠く〉ことなのであるか。

小林氏自身は、ルソー作曲ではない、という積極的な〈根拠〉を

示してはおられない。いわば、ヘルソー作曲という伝聞だけで、原曲が定かでない、というのが、氏の立脚点である。そこから、その〈伝聞〉の張本人である音楽取調掛長、伊沢修二を、へ一犬虚に吠ゆたとして非難的にされたわけである。ルソーの原曲の発見、あるいは伊沢がヘルソー作曲とした論拠の解明という問題は、私自身も、これまでの音楽取調掛研究、伊沢修二研究の途上、いつも頭の片隅を離れなかつた問題であるので、小林氏への反論を試みるどころから、本稿を始めてみたい」（四三、ページ）と語っている。

馬場氏は小林氏とおなじく、ヘルソー作曲として《見渡せば》を説明している最初の文献を伊沢修二の《唱歌略説》とし、この文献について詳しく紹介し、《伊沢自筆稿本》が東京芸術大学附属図書館所蔵のものほかに、長野県上伊那図書館にも別稿が残されていることを指摘している。馬場氏は伊沢修二の原文を引用しているが、ヘルソー作曲については「楽譜は仏国の学士にして音楽に著名なるルーサウ氏が睡眠中夢に作りたる曲にして、広く諸邦に行はるゝもの也其意ハ雅正婉美なる感情を暢ぶるもの也」と紹介しつつ、これだけでは出典が明らかではないという点はこれを認めている。

《ルソー作曲》説は《まじめな研究書》でもいきついているとい

小林氏の指摘に対して、馬場氏は、遠藤宏著《明治音楽史考》（昭和二十三年）に、この問題が敷衍され、「ルソーが一七七五年に作曲したものであって、各国の唱歌になってゐる」と説明がおこなわれている点を引証している。ここで注目されるのは、遠藤宏が《一七七五年》という作曲年代を明記していること、そしてつづいて《米英にも数種の歌詞》がついたものがあると言っている点であると指摘する馬場氏が、この遠藤宏の著書以外には《ルソーの作曲》という点以上のことを説明している文献がないこと、さらには作曲年代の典拠が明らかにされていないこと、そして米英の歌詞も、またそうしたものを収録している曲集も紹介がないことに大きな壁を感じておられたことであろう。

ところで、当時、音楽取調掛研究、あるいは伊沢修二の研究を推し進めておられた馬場氏の主要関心事は「伊沢修二の《無罪》を立証する」（四五ページ）ことにあったように思われる。そのためには「ルソーの原曲を発見するか、ルソー作曲であることを明記した米英その他の唱歌を発見する」（同ページ）という方法しかないとし、まず、後者を考察してみるのであるが、《小学唱歌集》に収録された曲の原曲をさまざまな典拠から明らかにする作業が、残念ながら《見渡せば》については挫折していることを認めている。

それでは前者の問題はどうだろうか。つづいて馬場氏はこの問題について次のように語っている。氏のかつての勤務校であるさる音楽大学で、ルソーの幕間劇《村の占師》の初版楽譜を入手されたが、「その中に、《見渡せば》（《むすんで開いて》）の原曲らしきものが発見された。それは《バントミーム》と題する村娘の登場に奏される一種の舞曲で、四声の器楽曲である。その主要旋律が、《むすんで開いて》と大変よく似ているのである。」（四六ページ）

馬場氏はここで、《見渡せば》と《むすんでひらいて》、それに《バントミーム》の三つの旋律を重ねて対比できるようにして挙げ、三つの旋律の特徴を説明している。こうした音楽上の分析については、いずれ述べなければならぬので、ここで紹介するところは割愛したいが、馬場氏はこうした点から、以下のような結論をみちびきだしている。「それ以外の基本的な点では、両旋律は、きわめて類似している。このようにみれば、ルソーの《村の占師》の《バントミーム》を《むすんでひらいて》の原曲とする指定は、あなたがち《根拠を欠く》とはいえないのではなからうか。」（四七ページ）

だが、問題点も依然として残されている。「とはいふものの、まだ疑問の余地が残っていないわけではない。まず、《村の占師》

は、タイトル・ページによって、一七五二年初演、一七五三年出版ということが明らかだが、前掲の遠藤宏《明治音楽史考》に挙げられている「一七七五年」という年代との関連が明白でないことと、遠藤氏の「一七七五年説」の典拠が不明だということである。(四七ページ)さらに《村の占師》を原曲とした場合に、それが伝えられた経路、《見渡せば》の形となった経緯が不明であり、欧米の唱歌集に依拠した可能性が強いにもかかわらず、その直接の証拠がいまのところないこと。そしてまた『唱歌略説』の中で、伊沢が「睡眠中夢に作曲した」と書いている点については、小林氏同様、まったく手がかりがない」(四八ページ)と。

馬場氏は、このあと、直接的なかたちでのこの問題に関するアプローチを終わり、音楽取調掛、ならびにその指導者の立場にあったルソー・ホワイティング・メイソンがおこなった唱歌製作の問題、唱歌のモデルとなった原曲の問題などについて語っている。そして最後に《見渡せば》も、英米の唱歌集を典拠としたものであったろうと推定し、伊沢修二が「一大虚に吠えた」のではないだろうと、小林氏に対して、抗議、批判の言葉を投げかけ、この論稿を閉じている。

この章の最初に紹介した小林善彦氏は、翌年の昭和四十八年

(一九七三年)のはじめに、東京大学出版会が刊行している雑誌《UP》(第二巻第一号、昭和四十八年一月)に《ルソーの作曲》という四ページほどのエッセイを発表された。これは直接馬場氏の論文に対する反論とはなっていないが、朝日新聞の小論以後に判明した事情を紹介している。

このエッセイについてもその趣旨を要約してみよう。小林氏は今までの事情をもう一度くりかえした上で、《むすんでひらいて》がルソー作曲だという説はあっても、明快に根拠を示してくれる者が皆無であることを指摘し、小学唱歌集の編集のほうから迎っていた時、伊沢の《唱歌略説》を知り、そこにあった「仏人学士ルソー氏が睡眠中に作曲せり」という解説に出会ったことを述べている。「周知のごとく、ルソーは学校教育というものを一切受けていないから、《仏人学士》というのはなにかの間違いとしても、彼が睡眠中に作曲したという話も聞いたことがない。これは伊沢修二の思い違いではないだろうか、とわたしは考えたのであった」(二二ページ)

この《学士》おそらくは《学者》、《思想家》の意であろうが、小林氏はルソーが睡眠中に作曲をしたとの説が伊沢修二の《思い違い》ではないかという問題を提起されたのだ。

小林氏はこのあと、いくつかのデータを知る機会に恵まれる。

ひとつは《むすんでひらいて》の旋律が、さる英語の歌の本の中に、《Days of absence》というタイトルで載せられ、その作者としてルソーの名が、また一七七五年という年が、そしてまた《Rousseau's Dream》という言葉が記されているというインフォメーションであり、小林氏は「ヘルソーの夢」が《睡眠中の作曲》に変わったのだらうとは、容易に推測できる」（二二ページ）と考えておられる。

もうひとつのデータは、《グロープ音楽辞典》の《Rousseau's Dream》の項目である。この《ルソーの夢》は一九世紀初頭に英国で大いに好まれた調べであり、讚美歌調として用いられたものがあった。小林氏の以下の説明は《グロープ》の第五版によっているが、ルソーの《パントマイム》と《むすんでひらいて》の旋律をもとにしたヨハン・バプティスト・クラマーの作品の主題が対比的に掲載されているこの音楽辞典の説明にも、いささかの疑義の念を提出しておられる。「……比較してみると、わたしのような素人には、似ているような気がしないでもないが、同時に両者が同じだとは思えないほどの相異もある。」（一三ページ）

これこそ、先に馬場氏が《パントマイム》を《むすんでひらいて》の原曲とする推定がかならずしも根拠を欠くとはいえないのではないかと問題提起をおこなったことと密接に関連する問

題であろう。馬場氏が音楽上の共通点を問題にして、これを編曲と原曲の関係として捉え、とにかく肯定的に扱っているのに対して、小林氏は、二つの旋律の相似点もなくはないが、しかし同一曲とは思えないほどの変わりようから、《その間の変化》が問題であり、こうしたルソーの原曲から、クラマーの主題への変化に加えて、その後、英国からアメリカへ、そしてアメリカから日本への渡来の経路は、ほぼ確かだと主張されている。最後の一節を引用すれば、小林氏のこの問題についての意識が奈辺に存するかが明らかとなるだろう。

「最後に、わたしの感想をつけ加えるならば、ルソーの原作の部分と、現在われわれが知っている《むすんでひらいて》の曲との間には、かなりはなはだしい相違がある。ふつうわれわれのように文学や思想を研究する場合、ルソーの作品という時には、彼自身が書いたもの以外はそう呼ばない。しかし音楽の領域においては、多少原曲と異なっても、ルソーの作曲ということは許されているようである。だがそれも程度問題であって、《むすんでひらいて》のように、最初のメロディーからかなりの変貌をとげたものも、やはりヘルソー作曲」なのだろうか。これがわたしの疑問である。」（一三ページ）

内容的な問題についての詳説を収めて措いて結論的に言えば、小

林氏のこの主張、あるいは疑問は、ことこの《ルソーの夢》の問題についても射ているといわなければならない。その点をくわしく論証するのが本稿の目的であるが、本論に入る前に、なお、いくつかの関係資料を紹介しなければならない。

本稿の冒頭に文章を引用した園部三郎氏は日本に《音楽家ルソー》、いなむしろ《音楽思想家ルソー》を紹介した先駆的な存在である。その園部氏が戦時中、ならびに戦後、《むすんでひらいて》をルソーが作曲者であると断定的に紹介したのは、おそらく伊沢修二と遠藤宏の両権威の記述に従ったことであろう。この考えは園部氏が昭和四十三年（一九六八年）に発表された論稿《J・J・ルソーの知られざる側面》（《季刊芸術》第二卷第二号・昭和四十三年四月号）でも変わっていない。その冒頭で、園部氏自身の旧稿《ジャン・ジャック・ルソーと音楽》のはじめの一節（本稿第一章参照）を紹介しているばかりか、第七節でも「この意味で、ルソーは、多くの小歌曲ロマンスやモテットを作曲している。《結んでひらいて》もそのロマンスのひとつなのである」（九六ページ）とさえ語っておられるからである。

園部氏は、さらに《むすんでひらいて》への疑惑——ルソー研究余録——（《音楽教育研究》第十六卷第四号・昭和四十八年「一九七三年」四月号）で、小林氏ならびに馬場氏の間接的な論

争を取り上げ、ルソー研究者としての立場から、この問題に立ち入っている。園部氏は《むすんでひらいて》ルソー作曲説》に對して、ある時期には懐疑的になったこともあったが、しかし「後にくわしく述べるさまざまな理由から、わたしはほとんど常にルソーの作品であるという立場をとりつづけてきた。いまもお、非科学的ではないかといわれればその通りであるが、厳密に言えば、《疑わしくはあるけれども、否定する根拠もない。むしろ、そうではないにしても、ルソーの作品らしく思われる背景がかなり強い》という程度の肯定的立場をとっている。」（二三ページ）と、自己の立場をかなり明白にしておられる。

園部氏はこの問題に対する否定的意見の主張者として私の名を挙げておられるし、また次のようにも述べておられる。「わたしは先ほど述べたグロップの辞典のことと合せて、海老沢氏の懐疑的な姿勢に大いに同感することはできたが、まだ断定的に否定するのは早いとも考えていた。」（二五ページ）

これに先立って、園部氏は《グロップ音楽辞典》第五版の記述をとりあげ、その共通性を語りながら、次のような疑問をも提出している。「しかし、常識的にいえば、この歌曲の旋律の方が先にあって、それを基にしてより複雑な曲（この場合はパントミームとしての管弦楽曲）に、改作されたというのならば、ありうる

ことであるが、その反対の場合にはいささか疑わしいのではないかと思つたからであつた。」(二四ページ)この問題についても、やがて、本論でくわしく論じることとなるだろう。

園部氏は、この論稿で、《むすんでひらいて》の旋律が、《おやすみ》と題された歌曲としても見出されることを指摘し、その歌詞との関係で伊沢修二語るところのヘルソー夢中の曲」という表現が説明できるかも知れないと述べている。先の小林氏の論稿の折には説明を加えなかつたが、《グロブ音楽辞典》には、英国の音楽史家チャールズ・バーニーがルソーの《村の占師》を一七六六年に英国に翻案紹介したとある。園部氏はこの点についても次のように語るのである。「そのときの上演で聞かれた原作のなかの《パントミーム》から、バーニーが《むすんでひらいて》のメロディをアダプト(改作)したものであるとグロブ辞典は説明するのである。しかも、その説明のなかで、《この旋律が《占者》のバーネイの改作を通して、イギリスに紹介されたのはほとんど疑いない》と確言されているのである。」(二八ページ)

園部氏はさらにこの《むすんでひらいて》の旋律が讚美歌として歌われていることも指摘しており、またこのメロディーによつてさまざまな詩人が作詞していることも述べておられるが、最後に結論として次のように語つているのである。「そこで、わたし

自身に残された問題として、この曲が、ひよつとすると《パントミーム》とは無関係に、ルソーが書いたものではないかという疑問を頭に止めておきたいと思うのである。」(三一ページ)

園部氏はさらに《現代思想》第二巻第五号・昭和四十九年(一九七四年)五月号)の《ヘルソー特集号》においても、次のように語つていのである。「この日本でよく知られている《結んでひらいて》という歌曲のような単純簡潔な性格のものから出発してきわめて叙情に富んだ歌を書いた。」(八四ページ)これにはなお次の注がつづいていゝ。「この《結んでひらいて》については、ルソーの曲ではないと主張する人がある。事実、それを証明する確実な資料がないからである。しかしわたしはルソーのこの種の歌曲の曲調の共通性や、ルソーに興味を持つルソー研究者があげている前出の幕間歌劇のなかの舞曲に、この歌曲を想像させる変形が見られることなど、その他の理由で、《確証はないが、ありうる、ことだ》という立場を取つていゝ。」(八四ページ)

以上が、私自身の主張を除いて、今まで、この問題に関しておこなわれた種々の論議の主だった点である。以下本論においては、こうした諸点に関して、ひとつひとつ、私自身の研究から結論を導き出していくこととしよう。